

ヴァージニア会社と公式文書 (その一)

高橋正平

序

1606年4月10日発布のジェームズ一世の勅許状により本格的に活動し始めたロンドン・ヴァージニア会社は1624年に解散するまで合計三回の勅許状を発している。いわゆる公式文書によるヴァージニア植民宣言である。以後イギリスによるヴァージニア植民を国内外に宣言し、植民活動が本格的に始まることになる。イギリスの海外進出はもとよりヴァージニア植民が最初ではない。ハリオット (Harriot)、ハクルート (Richard Hakluyt)、パーチャス (Samuel Purchas) 等の記録が雄弁に物語っているように、イギリスはアメリカのみならずヨーロッパ大陸への進出をも企ている。そもそもイギリスの海外進出の目的は何であったのか。これが以後の本論のテーマである。ジェームズ一世の勅許状がうたっているように、ヴァージニア植民の目的は異教徒へのキリスト教布教であったのだろうか。ヴァージニア植民の宗教的性格を強調したミラー (Perry Miller) とは異なり⁽¹⁾、私は異教徒へのキリスト教布教は二次的な問題で、植民による金銭的な利益こそがヴァージニア会社及びヴァージニア植民の第一の主要目的であり、それであるがゆえに冒険植民者 (adventurers) や植民者が未開の地ヴァージニアへ一攫千金を夢に抱き、イギリスを後にしたと私は考えている。この問題の解明にあたり私はヴァージニア会社・植民に関連する資料に吟味を加えるが、その資料には以下がある⁽²⁾。

- (1) 会社成立に関わる王と枢密院によって発布された特許状、勅許状及び命令書。
- (2) 宮廷管理書に記録されている冒険商人の活動報告書。ここには植民、土地の認可、その他植民を推進し、収入増加のための経済政策・計画が記録されている。
- (3) 植民事業を行うに際し、会社が植民統治者へ与えた依頼、植民者への規則、指示。
- (4) 植民現地からの報告、宣言書、書簡、不平。
- (5) 一般人から植民事業への信頼を得、冒険商人を確保し、会社の会員の関心、支持を維持するために出版した宣伝書、広告、宣言書、パンフレット、説教。
- (6) 会社の会員と個々の植民者との間の私的往復文書。
- (7) 17世紀の他の会社や諸都市の記録と政府役人かヴァージニア会社の業務には直接関係していない人達の記録。

本論では、公的文書によるヴァージニア会社・植民に関する公的文書と私的文書から植民事業の実体解明にあたるものである。本論では主として上記の(1)(3)(4)を中心に論を進めたい。最初ジェームズ一世の三つの勅許状、種々の指示・命令・布告と及びヴァージニアからの書簡・報告書、及びハリオットのヴァージニア報告書、*A brief and true report of the new found land of Virginia* (1588)、ハクルートの *Virginia Richly Valued* (1609)、ストレーチェイ (William Strachey) の *The Historie of Travel into Virginia Britannia* (1612)、パーチャスの *Hakluytus Posthumus* (1625) 等からヴァージニア会社及びヴァージニア植民の目的・実体を明らかにしたい。

1

ジェームズ一世の勅許状は1606年4月10日、1609年5月23日、1612年3月12日の三回にわたって発布されているが、特に最初の勅許状はヴァージニア植民の目的を明示したものであるとして注目に値する。ヴァージニア植民は1585年、87年のウォルター・ローリー (Walter Raleigh) によるロアノーク島植民失敗後、ジェームズ一世が勅許状を発布することによってそれまでの私的な事業から国家的事業へと方針を変え、ヴァージニア植民に対し国家が主導権を握ったのである。ジェームズ一世がアメリカ植民を認可した背後には英国内の社会的な理由があり、対外的にはカトリック大国スペインへの対抗意識と英国のヨーロッパ諸国への経済的依存からの脱却があり、ヴァージニア植民により英国は自国経済の自給自足を望んでいた。この問題についてはハクルートが『西方植民論』(*A particular discourse concerning the greate necessitie and manifolde commodityes that are like to growe to this Realme of Englande by the Westerne discoveries lately attempted*) (1584) で言及しているが⁽⁹⁾、彼によれば英国の毛織物等の市場開発、余剰物資の供給地、余剰人口に由来する失業者・浮浪者問題及びスペインを相手にする場合の基地としてのアメリカ植民の重要性からしてヴァージニア植民はどうしても必要であった。ヴァージニア植民は英国内の社会問題解消と同時に英国の国威発揚的な性格を伴った海外進出であったとも言える。英国の国威発揚と国内の社会問題解決を一気に狙ったヴァージニア植民はジェームズ一世の勅許状によってロアノーク島植民失敗後の英国民に新たな局面を迎えることになった。ヴァージニア植民の中心的存在となるジェントルマンの台頭、余剰人口の出現、植民事業へのロンドン商人とジェームズ一世王朝の関心があいまって、ジェームズ一世は1606年4月最初の勅許状 (charter) を発布し、ヴァージニア植民を国家事業として認可することになる。海外植民という大事業を行うに際し最大の問題点はその運営資金である。いかにして海外植民に必要な資金を集めるか否かが植民成功の鍵を握っている。ローリーのロアノーク植民が物語っていたようにもはや海外植民は個人の資金ではとうていやりおえることはできない。それでできるだけ多くの植民賛同者から資金を集めるために共同出資会

社 (Joint Stock Company) が設立されることになった。会社はあらかじめ価格を決め、賛同者に株式を配当して資金を集め、植民の利益を出資者に配当する方法をとったのである。共同出資会社設立の趣旨からヴァージニア会社の全容が浮かび上がってくる。ヴァージニア会社はロンドン商人のヴァージニア植民での利益追求とジェームズ一世王朝がかかえる種々な問題解消が合致したことから生まれた商業的色彩が極めて強い会社である。ところが1606年の第一勅許状を見ると、会社の商業的性格は希薄化され、代わりに会社の宗教的使命が全面に出されていることがわかる。第一勅許状では植民地の地理的範囲の明示、ヴァージニア会社とプリマス会社の植民領域設定、王と王の代理人の権限の明示の後勅許状は次のように言う。

Wee, greatly commending garciously accepting of their desires to the furtherance of soe noble a worke which may, by the providence of Almightye God, hereafter tende to the glorie of His Divine Majesties in propagating of Christian religion to suche people as yet live in darknesse and miserable ignorance of the true knowledge and worshippe of God and may in tyme bring the infidels and salvages living in those parts to humane civilitie and to a settled and quiet govermente, doe by theise our lettres patens graciously accepte of and agree to their humble and well intended desires;

(p. 2) ⁽⁴⁾

「神の知識と崇拜の暗闇と不幸な無知のなかにまだ住んでいる人々へキリスト教を布教」し、「やがてはかかる地に住んでいる異教徒と未開人を人間的な礼儀正しさと落ちついた静かな統治」へと至らす「かくも高尚な事業の促進」とうたう上記の文章には商業的な会社の姿は全く見られない。ヴァージニア植民者へ強い影響を及ぼしたハクルートの『西方植民論』第一章でも彼は、英国の西方植民の第一の目的を「キリストの輝かしい福音を宣べ伝え」「正しい、完全な救いの道に引き入れる」こととし、これが「まず真っ先にやられるべき主要な仕事」とし、いかにキリスト教徒にふさわしい仕事を植民において行うかを強調している⁽⁵⁾。ジェームズ一世の第一勅許状はこのような流れを汲み、まずキリスト教の布教を全面的に掲げる。一般の植民者や冒険植民者が何をもってヴァージニア会社へ参加し、出資したかと言え、それは利益なのである。ヴァージニア会社を「共同出資会社」としたこと自体が会社の性格を如実に表している。一種の株式会社への投資者が何を目当てにしているかは容易に理解できる。しかしながら上に見たように会社の使命をキリスト教布教におく勅許状の真の意図はどこにあったのか。第一勅許状にはヴァージニアでの金、銀、銅発見の際して、金銀に関してはその $\frac{5}{1}$ 、銅に関しては $\frac{15}{1}$ をロンドンの親会社に納めなければならないとの規定があり、ヴァージニア会社としてはこれが出資者

への配当にあてるべき利益である。しかし第一勅許状は全体的にはヴァージニア会社植民の宗教的使命が特記され、一般の出資者や植民者の最大の関心事である利益配当についてはあまり触れていない。公式の勅許状で触れるには余りにも露骨すぎる嫌いがあったのかもしれないが、それにしても出資者が最も知りたい「利益」に関する記述が希薄なものには少々驚かされる。東インド会社同様ヴァージニア会社植民への最大の関心事は配当であったはずである。会社が期待していた金銀銅は発見されなかったが、タバコの発見と国内でのタバコ需要からくるタバコ栽培への関心はやはりその利益であった。ベン・ジョンソン等は『東行きだよおー！』（1605年）で「ヴァージニアには金が豊富である」と書き、またマイケル・ドレイトン（Michael Drayton）の「真珠や金を得るために、我々の真珠や金を手にするために、地球唯一の楽園ヴァージニアよ」（Ode To the Virginian Voyage, 1606）は当時の一般人がヴァージニアに対して抱いていたイメージであろう。ヴァージニアは人々に一攫千金の夢を実現させてくれる場所であったのである。1606年12月20日発布の『規約、指示、命令』（ARTICLES, INSTRUCTIONS AND ORDER）では国王直属ヴァージニア評議会の設置とその役員選出について記されているが、そこでもキリスト教布教について触れている。

... and wee doe especially ordaine, charge and require the said Presidents and Councells and the ministers of the said several Colonies respectively, within their several limits and precincts, that they with all diligence, care and respect doe provide that the true word and service of God and Christian faith be preached, planted and used, ... (p. 15)

1609年5月23日、ジェームズ一世は第二勅許状を発布する。この勅許状はベーコン（Sir Francis Bacon）の協力を得てエドウィン・サンディズ（Sir Edwin Sandys）が作成したと言われているが、ジェームズ一世の恣意的権力による統治から被統治者の同意と植民者の労働の結果を享受する権利重視の統治を容認したものである。注目すべき点は資金確保のために株式を公開し、自費でのヴァージニア渡航者は株主の地位が保証され、資金のない者はヴァージニアで7年働くという条件で会社の年季契約奉公人として渡航でき、7年の奉公があける際に奉公人は自由となり、さらに会社の利益の配当と最低100エーカーの土地の配分を受けることになった。この勅許状では、植民者にヴァージニアでの金銀銅等の発掘権を与えると共に、多くの職人、同業者組合にヴァージニア植民に参加させていることも注目に値する。ヴァージニア植民の目的がより明確化されている点で第二勅許状からヴァージニア会社の全容がうかがい知れるが、ヴァージニア会社組織の運営強化をねらい国王の介入を最小限にいとめ、植民者個人の権利を重視した点でアメリカ憲法の原点を指摘する人もいる。その第二勅許状でも最後にはヴァージニア植民の主要な目的

は異教徒の改宗であると次のように言っているのである。

And lastly, because the principall effect which wee cann desire or expect of this action is the conversion and reduction of the people in those partes unto the true worship of God and Christian religion, ... (p. 54)

「神と真の宗教へのかかる土地に住む人々[インディアン]の改宗と救済」こそがヴァージニア植民が本来目指すべき大目的なのである。会社の商業的性格を明確にしたあとで最後に会社の宗教的使命をわざわざ付け加えることで会社はヴァージニア植民の大儀名文を植民関係者に訴えている。1609年5月、ヴァージニア総督トマス・ゲーツ（Thomas Gates）へのヴァージニア評議会の指示・命令・規約ではヴァージニア統治のために様々な助言がなされているが、カトリック大国スペインを意識したプロテスタントとしての英国国教会の布教活動の重要性を強調し、次のように言う。

You [Thomas Gates] shall take principall order and care for the true and reverent worship of God that his worde be duely preached and his holy sacraments administered accordinge to the constitucions of the Church of England in all fundamentall points, ...And all atheisme, prophanes, popery, or schisme be exemplarily punished to the honor of God and to the peace and safety of his Church, ... (p. 57)

無神論、冒瀆、ローマカトリック教、教会分裂は神の名誉と教会の平和と安全のために戒めてとして処罰されねばならない。更にヴァージニア植民の最も敬虔・高尚な目的として原住民インディアンのキリスト教改宗を掲げ、実際にインディアンの子供をキリスト教に従って教育すべきことを指示している。

You shall, with all propensenes and diligence, endeavour the conversion of the natives to the knowledge and worship of the true God and their redeemer Christ Jesus, as the most pious and noble end of this plantacion, ... (p. 57)

トマス・ゲーツへの会社からの指示には植民の強化のために南洋（太平洋）航路・鉱山の発見、交易、貢物、植民者のワイン、ピッチ、タール等生産向上をあげており、ヴァージニア植民の結果への大きな期待が寄せられているにもかかわらず、キリスト教布教をヴァージニア植民の第一の目的としていることに植民事業目的の複雑さが窺える。ヴァージニア会社の宗教的使命の強調はこれ以後も続く。

1612年3月12日発布の第三勅許状は勅許状としては最後のもので、ヴァージニア植民がいかなる結果をもたらしつつあるかが徐々にわかり始めてきた頃であるが、最初に“the propagation of Christian religion and reclayminge of people barbarous to civilitie and humanitie” (p. 76) に触れているのである。この第三勅許状では植民事業遂行のための資金集めに宝くじ導入の決定をしているのであるが、一方では宝くじによる植民資金集め、他方ではキリスト教布教といったように「聖」と「俗」が混在したヴァージニア植民の実体がかいま見れる。ヴァージニア会社発布の三回にわたる勅許状及び会社からの指示・命令等から本来は商業的性格の強い会社が宗教という大義名分を全面に持ち出し、植民の利益追求を背後に押しやっていることがわかる。ヴァージニア会社はすでに指摘したように本来は株式会社であり、株式会社は株主への利益の配分を行わねばならない。キリスト教布教の名のもとでは一般の人々が植民事業へ参加をしたか否かは疑問である。もちろん信仰心に厚い人もなかにはいたであろうが、ベン・ジョンソンやドレイトンが抱いていたヴァージニアのイメージがより一般人の間では強かったと思われる。ヴァージニアと言えば「金」なのであり、これはヴァージニア植民以前から英国がヴァージニア植民に抱いていた妄想であった。以上はヴァージニア植民に関する公式文書であるが、ヴァージニア会社による「宣言書」(declaration) と実際にヴァージニアへ行った人々の報告書や書簡ではヴァージニア植民はどのように報告されているか、次にこの点について触れてみたい。

2

1606年、1609年、1612年の勅許状発布後、ヴァージニア会社は当初の予想に反する植民へのかんばしくない実状を否定し、さらなる植民への関心を引き起こすために「宣言書」と報告書を出版する。実際1606年の植民以来植民が目指していた現地に政情の安定、経済的繁栄及びインディアンとの和解は期待していたほどではなかった。そのような状況のなかで「宣言書」や報告書は勅許状に沿い、ヴァージニア会社を全面的に支援する。これらを出版年代順に列挙すると以下の通りである。

- (1) Robert Johnson: *Nova Britannia* (1609年2月)
- (2) Robert Gray: *A Good Speed to Virginia* (1609年4月)
- (3) *A True and Sincere Declaration of the Purpose and Ends of the Plantation begun in Virginia* (1610)
- (4) *A True Declaration of the Estate of Virginia* (1610)
- (5) R. Rich: *News from Virginia* (1610)
- (6) Robert Johnson: *The New Life of Virginia* (1612)

- (7) William Strachey: *For the Colony in Virginea Britannia* (1612)
- (8) Alexander Whitaker: *Good News from Virginia* (1613)
- (9) Ralph Hamor: *A True Discovrse of the Present Estate of Virginia* (1615)
- (10) *A Declaration of the State of the Colonie and Affairs in Virginia: with the Names of the Aduenturers, and Summes Aduanced in that Action* (1620)
- (11) Edward Waterhouse: *A Declaration of the State of the Colonie in Virginia* (1622)

この他にも当時の著名な説教家によるヴァージニア会社擁護の説教やヴァージニア植民者・探検家からの報告書 — ハリオットの『ヴァージニア報告』(*A brief and true report of the new found land of Virginia*), スミス (Thomas Smith) の『ヴァージニア入植についての真実の話』(*A true relation of such occurrences and accidents of noats as hath hapned in Virginia since the first planting of that Collony, which is now resident in the South part thereof, till the lastb returne from thence*), ストレーチェイ (William Strachey) の『ヴァージニア旅行記』(*The Historie of Travell into Virginia Britannia*), パーシー (George Percy) の『1606年ヴァージニア植民談話から集められた観察報告』(*Obsevationes gathetred out of a Discourse of the Plantation in Virginia 1606*) 等 — 及び私信があるが、それらについては校を改めて論ずる予定なので、本論では上記の「宣言書」、実際にヴァージニア植民へ赴いた人達からのヴァージニア植民についての報告書からヴァージニア植民の実状を見てみたい。上記の(5)のRichの『ヴァージニア便り』はヴァージニア植民称賛の韻文で、(7)のStracheyの『イギリスヴァージニア植民のために』はヴァージニア植民運営・管理に関わる法律集で、本論とは直接関係がないので取り上げない。他の宣言書、報告書はいわばヴァージニア会社の宣伝文書で結果は自明であるが、勅許状との関係を見るとすべてが勅許状に沿った内容で、ヴァージニア植民賛美の文書であることがわかる。これらの宣伝文書ではヴァージニア植民の正当化、目的、利益について論じられ、ヴァージニア植民の先行きに暗雲がたちこめてきたなかで、出資者及び植民者に希望を与えることを目的としている。

最初に(1)ジョンソンを見てみたい。ジョンソンが *Nova Britannia* を発表した1609年はヴァージニア植民にとって危機の年であった。1606年に勅許状を得て、ヴァージニア会社は同年8月と10月に植民者を送るが植民は成功と言えず、同年12月のクリストファー・ニューポート (Christopher Newport) 等による植民が一応の成功を収める。ニューポートは1608年6月に帰国するが、ヴァージニアでは指導者が次々と交代し、ヴァージニア植民の前途が危ぶまれていた時期であった。しかしこの機会にヴァージニア会社は巻き返しを狙い、次々と「宣言書」、報告書、説教による宣伝活動を開始した。ジョンソンの *Nova Britannia* はかかる背景から書かれた宣伝文書である。当然のことながらジョン

ソンはヴァージニア会社・植民を全面的に支持する。会社はそれをすぐさま出版し、ヴァージニア植民を希望する人達及び出資予定者に希望と安堵の念を与えようとする。ではジョンソンはいかにしてヴァージニア植民を擁護しているのか。ジョンソンは、最初にカトリック側（特にスペイン）からのアレグザンデル一世の寄進状によるアメリカ大陸への領土権主張には何も歴史的根拠がないと主張し、イギリスのヴァージニア進出には何ら問題はないと指摘した後で、ヴァージニア植民の現状、目的、今後の取るべき道を指摘し、結果としてヴァージニア植民は十分に植民の価値があり、最初は利益がないように見えるが、決してあきらめることのないようにとの激励で終わっている。宣伝文書として果たすべきことは十分に果たしている内容のものである。ジョンソンにとってヴァージニア植民という“high and acceptable worke”は、“advance and spread the kingdome of God, and the knowledge of his truth, among so many millions of men and women, savage and blinde, that never yet saw the true light shine before their eyes, to enlighten their mindes and comfort their soules.⁽⁶⁾ (B)” に資する事業である。これは既に見た勅許状が挙げていたヴァージニア植民の第一の目的であるキリスト教のインディアンへの布教と一致しており、ヴァージニア植民がまずなすべきことは植民地でのキリスト教の推進と布教である。キリスト教に無知な原住民はいわば暗闇の中にいるのも同然で、その暗闇から原住民を救い出し、教化するのはキリスト教の義務であると考え。原住民をキリスト教に改宗させることは神の王国推進に至り、「迷える羊」である原住民を救うのは神から英国に与えられた使命であるとさえ言う。このようにジョンソンはヴァージニア植民のキリスト教的使命を明確にする。ヴァージニア植民は世間で流布されているような金銭的利得を目的とした植民ではない。何はともあれ最初に考えるべきは異教徒のキリスト教への改宗であり、その改宗を通して英国は神の国建設に貢献する。これはヴァージニア会社としては崇高かつ遠大な模範的な植民のための大儀名文である。ジョンソンは次にヴァージニア植民の目的を国王の名誉と王国拡張とする。ヴァージニア植民を単なる個人的な商業的事業にとどめず、英国王と国家のためというより大きな視点からヴァージニア植民を見つめるところによって、人々に愛国心を植え付け、さらにはスペインにとって代わる世界のリーダーとしての英国を強く人々に訴えることを忘れない。ジョンソンは次のように言う。

But for my second point propounded, the honour of our King, by enlarging his Kingdomes to proue how this map tend to that: no argument of mine can make it so manifest, as the same is cleere in it selfe; Diuine testiments shew, that the hour of a King consisteth in the multitude of subiects, and certainly the state of the Iews was farre more glorious, by the conquests of Daudid, and under the ample traigne of Solomon, then euer before or after: (C2)

ジェームズ一世は David 王, Solomon 王にたとえられ, ヴァージニア植民は旧約聖書の David や Solomon の他民族征服に比較され, ジェームズ一世のアメリカ植民には前例があることを指摘する。王の名誉は臣下の増大にあり, そのためには他国の植民も許されるという論理である。予言者 Daniel は, 多くの者を正しい道へ導き入れる征服により永遠に光り輝いた。そのようにジェームズ一世もヴァージニア植民によって異教徒を義の道へ導くことにより歴史に永遠にその名を留めることになる。ジョンソンのこれらの言葉にはジェームズ一世を意識した愛国的な王への賛辞が伺われるが, 聖書の人物と彼らの行動を巧みに比較させ, ヴァージニア植民の正当化を訴えるジョンソンの手法は以後の宣伝文書のさきがげとなる。特に説教家達によるヴァージニア植民擁護はすべてこの手法によっており, 以後ジェームズ一世のヴァージニア植民者は旧約・新約の様々な人物とその行動にたとえられ, 「神の書」からのお墨付きを付与されるのである。この愛国的心情は更に続き, ヴァージニア植民により王の英知, 威厳, 名誉は世界の果てまで広がる。

And upon good warrant, I speake it heere in priuate, what by these new discoueries into the Westerne partes, and our hopefull settling in chiefest places of the Cast, with our former knowne trades in other partes of the world, I doe not doubt (by the helpe of God) but I may liue to see the daies (if Merchants haue their due encouragement) that the wisdome, Majestie, and Honour of our King, shalbe spread and enlarge to the endes of the world, our Nauigations mightely encreased, and his Maiesties customess more then trebled. (C2)

スペインを意識した英国民へ対する国威発揚の意図をも狙ったジョンソンはこのようにヴァージニア植民の目的を明確に述べる。英国民のヴァージニア植民への熱意がさめつつあったなかでヴァージニア会社及びジェームズ一世側に立ち, ヴァージニア植民の正当性・有用性を強く国民に訴えるのである。ヴァージニア会社は本来は商業的な株式会社であり, 出資者・植民者の目的は見返りとしての「利益」にあったことは確かである。それにもかかわらずジョンソンはさかんに宗教的使命と英国の国威発揚を植民の目的として挙げ, 英国民を激励しようとする。それではジョンソンはヴァージニア植民の利益に関して何も触れていないかというところではなく彼もそれについては触れてはいる。その前にジョンソンはヴァージニアの穏和な気候, 豊富な資源を称賛し, 植民に不足するものは何もないことを強調し, ヴァージニアを “this earthly Paradise” (B2) とさえ呼んでいる。ジョンソンはヴァージニアの土地の価値は今はないかもしれないが, 時間と資金があればいずれは良くなるという。

And howsoever those grounds in Virginia are now but little worth indeed, yet time and meanes will make them better, considering how they passe our ground in England, both in regard of the soile and climate, fitter for many precious uses; (C)

ジョンソンが *Nova Britannia* を書いた 1609 年 2 月はヴァージニア植民が始まって 2 年が経過していたが、ヴァージニアでの植民実績は期待していたほどではなかった。とにかく植民者をヴァージニアへ送るには資金が必要である。しかしヴァージニアでの経過が思わしくない状況のなかで資金投資への見返りがあるかは疑わしかった。ジョンソンはこれらの事情を十分に把握したうえで、最初に植民の実体とはほど遠い宗教的使命を植民の目的に掲げ、その後に植民事業の本来の目的である利益的活動に触れる。この世の楽園であるヴァージニア植民による利益は何なのか。ジョンソンは金銀には触れない。12 ポンド 10 シリングの出資によって出資者は 7 年後に少なくとも 500 エーカーの土地を取得できるのである。とにかくただちにヴァージニアへ行き、先発隊を支援することが先決であり、その結果によってさらに株の配当も可能となる。ヴァージニア植民は “so rich a prize of hopefull euent” (C2) であり、今そのチャンスを逸するべきではない。ジョンソンはヴァージニア植民の利益については直接的には言及しない。ただ何もしないよりはまず行動せよと訴え、そのためにヴァージニア会社に投資を呼びかけるのである。ジョンソンの主張はヴァージニア植民宣伝文書としては模範的な文書と言える。聖書からの植民の正当化、スペインへの対抗意識からくる国威発揚、更にはヴァージニア植民投資からの確実な収益等、人々の関心事を巧みに取り上げている。ジョンソンは直接にはヴァージニアへは行ったことがないのだが、ヴァージニアの風土や豊かな自然についてはあたかも本人が見てきたかのような描写で、説得力のある内容となっている。以後のヴァージニア植民宣伝文書はジョンソンの宣伝文書と同様の手法で書かれることになる。次に同じ 1609 年 4 月出版のロバート・グレイ (Robert Gray) の *A Good Speed to Virginia* を見てみたい。

3

グレイの *A Good Speed to Virginia* はスミスの『ヴァージニア入植についての真実の話』とジョンソンの *Nova Britannia* について、ヴァージニア植民に関する三番目の出版物である。グレイの *Good Speed* は 2 ヶ月前のジョンソンの *Nova Britannia* と内容が酷似しており、グレイは *Good Speed* を書くに際しジョンソンの *Nova Britannia* を読んでいたことは十分に予想され、実際グレイはジョンソンの *Nova Britannia* に言及している。ジョンソン同様グレイも旧約聖書の一節をヴァージニア植民に適応することから始める。グレイは、Joshua が Joseph の子供達の企てに許可を与えたのみならず祝福も与えたように、ジェー

ムズー世はヴァージニア植民者に与えてくれたと言う。いかにしてヴァージニア植民事業を聖書に適応し、読者に強いインパクトを与えるかは宣伝文作者の力量次第であるが、グレイはジョンソン同様ヴァージニア植民の宗教的使命を強調することを忘れはしない。「神の栄光」の促進と祖国の栄光と富みの拡大に従事する人は永遠の記録に残ると序文で述べ、ヴァージニア植民の目的を明確にする。それに反し、ただ現世的・世俗的な金銭目当ての植民者はそれだけで終わってしまうはかない存在である。グレイは次のように言う。

... they which preferre their money before vertue, their pleasure before honour, and their sensuall securities before heroicall aduentures, shall perish with their money, die with their pleasures, and be buried in euerlasting forgetfulness. (A3) ⁽⁷⁾

最初にこのように述べるグレイはヴァージニア植民の精神性を暗示する。ヴァージニア植民者は「美德」「名誉」「英雄的冒険」を具現化する人達である。利益を求めてヴァージニアへ行くのではない。冒頭にイスラエル人のカナン征服を記したヨシュア記の一節を掲げ、それを英国人のヴァージニア植民に適応する。グレイは英国の人口増加とヴァージニア植民をからませ、その先例をヨシュア記に求めるのである。ヴァージニア植民の場合植民により「神の栄光が促進され、王国領土が拡大され」、「国家の名誉と名声が世界の果てまで広がり、普及される」(B2)。ジョンソンと同様の愛国心である。ヨシュア記の中にヴァージニア植民の先例を見出すことでグレイはジェームズ一世をヨシュアと同一視する。旧約聖書にジェームズ一世の原型を見出すのである。なぜヨセフとヨシュアの子供達が領土を拡張したのかと言えば、人口増加への対処である。人口増加は国家が偉大であることの証であるが、限られた国土に収容できる人数は自ずから限られてくる。それでヨシュアが人口急増問題解決に選んだ方法は余剰人口の国外移住であった。しかしここで問題となるのは移住先の先住民との衝突である。この問題を先住民の教化という観点から解決する。おおむね未開の地に住む先住民は真の意味での神を知らない。そこで彼らに真の神を教え、真の神への道を歩ませることが神を知らない未開人にもまた神にとっても偉大なる行為となる。グレイは次のように言う。

Seeing therefore men by nature so easily yeelde to discipline and gouernment upon any reasonable shewe of bettering their fortunes, it is euerie mans dutie to trauell both by sea and land, and to uenture either with his person or with his purse, to bring the barbarous and sauage people to a ciuill and Christian kinde of gouernment, under which they may learne how to liue holily, justly and soberly in this world, and to

apprehend the meanes to saue their soules in the world to come, rather then to destroy them, or utterly to roote them out; (C2)

キリスト教の布教によって未開人を改宗させるという口実のもとに植民は可能となる。野蛮で未開な人々を文明化されたキリスト教的統治へと至らせることで未開人は現世で正しく生き、来世では魂の救済が保証される。あくまでも植民が行うことは先住民の教化であり、彼らにキリスト教を教え、広めることは神の王国拡大にも通じ、一方で人口問題解決、他方では神の国建設に貢献することになる。始めに「植民」ありきで、その後に植民正当化がくる。グレイにとってヴァージニア植民の第一の目的は先住原住民の教化であり、植民は “to drawe the Sauages from their barbarous kinde of life, to a more ciuill, honest, and Christian kinde of life” (C3) であり、未開人の教化を伴う植民はそれ自体が合法的なのである。グレイはこのように英国内の人口問題解消、キリスト教の布教と原住民の教化をヴァージニア植民の目的として挙げるが、ヴァージニア植民に反対することは「神、王、教会、国家」への反対であるとさえ言明する (D2)。植民の宗教的使命を強調するグレイは植民の利益性についても言及することを忘れはしない。そもそもヴァージニア会社が商業的色彩の強い会社であることを考えれば会社の商業性に言及することは当然であり、また、一般の人々も宗教的説得よりも即座の利益の見返りに興味をもっていたことは明白である。ここでグレイは単刀直入にヴァージニア植民の利益には言及しない。グレイが *Good Speed* を書いた 1609 年にはヴァージニア植民についての報告や実際ヴァージニアへ行った人達が帰国し、ヴァージニア植民の現状についての情報がかなり一般人にも届いていたはずである。ヴァージニア植民からの利益に対してはよい情報はなかった。グレイはそのような植民反対者に対して長い目でヴァージニア植民を考えることを要求する。現在の我々も先人の達成があればこそ恩恵や安楽な状態を受けているのであって、そのように我々は後生の人々のためにあるのだという。

We sow, we set, we plant, we build, not so much for our selues as for posteritie; we practise the workes of Godlines in this life, yet shall we not see the end of our hope before wee injoy it in the world to come: It is a blessed thing to be blessed of posteritie. (D)

現在の人々はヴァージニア植民の結果がどうなるかは全くわからない。即座の利益がないからといって植民から手を引くことがあってはならない。長期的に見れば必ずや植民の利益はあるはずだ、とグレイは短期的な即座の利益を期待する人々を説得する。グレイは更に言葉を続けて永遠の備えを怠る者には確かな永遠の希望はありえず、自分のために存

在する人は後生に名を残さないという。ヴァージニア植民に加わることはいわば永遠に名を残すことで、目先の利益などは全く問題ではないのである。今は何も利益はないかもしれないが長い目で見れば必ずや得る物があるという主張はこのあとの説教家特にジョン・ダンが強く聴衆に訴えていたテーマでもあるが、即座の利益のを願う人々に早まった期待は捨てよと言う。グレイの *Good Speed* はジョンソンの *Nova Britannia* を受けて、ジョンソンが扱っていたヴァージニア会社の諸問題を扱っているが、特にヴァージニア植民を国内の人口問題解決手段として考え、それに伴う他国の植民地化の合法性、長期的な観点からの植民事業考察へと論が展開する。グレイにとってもヴァージニア植民のそもそもの目的は未開人へのキリスト教布教である。これが植民の大前提で、彼はそのために聖書から前例を見だし、ジェームズ一世の行うヴァージニア植民には聖書にも前例があることから植民の合法性を訴えるのである。一般の人々が最も関心があった利益については直接触れておらず、内容がやや理想的しすぎた点もある。しかし、ジェームズ一世から勅許状を受けた会社として利益称賛に走ることはできない。ジェームズ一世をも十分意識した宣伝文書としては「優等生」的な文書と言えよう。ヴァージニア会社・植民擁護の公式宣伝文書は言うなれば言いたいことは同じである。宗教的使命を帯びた植民の正当性こそが本来の植民の目的で利益は二の次である。ヴァージニア植民擁護の宣伝文書はこの主題をめぐって多くの人々が文書を著すことになる。次に見るのはヴァージニア会社による1610年の公式の「宣言書」である。「宣言書」ではヴァージニア植民についてどのように記されているか。

1610年ヴァージニア会社の理事、評議員の許可を得て、*A Trve and sincere declaration of the purpose and ends of the Plantation begun in Virginia, of the degrees which it hath receiued; and meanes by which it hath been advanced: and the resolution and conclusion of his Maiesties Council of that Colony, for the constant and patient prosecution thereof, vntill by the mercies of God it shall retribute a fruitful haruest to the kingdome of heauen, and this Common-Wealth*⁽⁸⁾ という長々しいタイトルの宣言書が出版された。ヴァージニア植民に対する様々な批判、中傷、誹謗、風評からヴァージニア植民を擁護するために公式の宣言書によってヴァージニア植民の目的、degrees、植民の手段及び植民評議会の決意と結論を偽りなく述べることによって、ヴァージニア植民への人々の関心を高めようというものであった。この宣言書でヴァージニア植民を「宗教的な高尚な実現可能な」事業と見なしていることに注目したい。植民の第一の目的は福音布教である。

The Principall and Maine Ends ... weare first to preach, & baptize into Christian Religion, and by propagation of that Gospell, to recouer out of the armes of the diuell, a number of poore and miserable soules, wrapt vpp vnto death, in almost inuincible

ignorance; (A3)

キリスト教を説き、福音の布教によりみじめな魂を悪魔の手から救出するという植民の目的はジェームズ一世の第一勅許状の文言を思わせる。ヴァージニア植民の第二の目的としてスペイン対抗の基盤としてヴァージニアに累壁を築くことである。

Secondly, to provide and build up for the publick Honour and safety of our gracious King and his Estates ... some small Rampier of our owne, in this oportune and generall Summer of peace, by transplanting the rancknesse and multitude of increase in our people; (A4)

ヴァージニアにおける対スペイン用の防御用の砦を築くことと英国内の人口増解決のためのヴァージニア植民は国内外の焦眉の問題を解消してくれる。最後に来るのが「利益」である。

Lastly, the apparance and assurance of Priuate commodity to the particular vndertakers, by recouering and possessing to them-selues a fruitfull land, from whence they may furnish and provide this Kingdome, with all such necessities, & defects vnder which we labour, and are now enforced to buy, and receive at the currencie of other Princes, vnder the burthen of great Customes, and heavy impositions, ... (A4)

ここで言及している“Priuate commodity”はヴァージニア会社への投資からの利益ではなく、「肥沃な土地」ヴァージニアでの農産物栽培から生ずる利益である。英国内で不足し他国に依存しなければならない農産物のヴァージニアからの供給により、他国からの経済的自立を目指す英国の政策と一致する利益である。これまで見てきた勅許状、ジョンソン、グレイと同様な内容の宣言書である。最初にヴァージニア植民の宗教的使命、対スペイン政策の一環としての植民及び豊かな土地ヴァージニアからの収益、これらがこの宣言書で述べられている。ジョンソンやグレイと異なり先住民の土地への植民についてはそれほど詳細には触れられていないが、これまでの植民の経過を述べ、ヴァージニア植民に対して様々なうわさ、中傷が流れていた中でヴァージニア会社は必死にそれらを打ち消し、植民の正当性・妥当性を訴え、植民への人々の関心を引き起こそうとしている。同じ1610年にもう一度ヴァージニア会社への誹謗反駁のために宣言書が出版されている。*Trve Declaration of the estate of the Colonie in Virginia, With a confutation of such scandalous reports as haue tended to the disgrace of so worthy an enterprise*⁽⁹⁾がそのタイトルである。タイ

トルにもあるようにヴァージニア植民現状の紹介とヴァージニア植民誹謗への反駁を目的として書かれた宣言書である。宣言書の著者は、ヴァージニア植民を（１）合法性（２）実現可能性（３）利益性、の三点から考察し、ヴァージニア植民はいずれにも合致することを指摘する。植民の第一の目的は宗教〔キリスト教〕を原住民に植え付けることであり、二番目の目的は国家の名誉と利益である。更に福音を述べ伝えることは確定した真理であるとも言う。

whether it be bee not a determined truth, that the Gospell should bee preached, to all the world, before the end of the world ? (B)

福音を異教徒に述べ伝えることは絶対的な真理であるが故に、ヴァージニア植民の合法性はたとえそれが先住民の土地への進出であっても許される行為となる。ここでも植民という海外進出が宗教の名の下に合法化されているのである。宣言書ではキリスト教布教の大前提のもとに植民の合法化を強調するが、それでは聖書からの植民合法性についてはどうなのか。これについて宣言書はオリゲネスの「神の行動は我々〔人間〕の訓令である」を引用して、創世記 11 章をあげる。神は “scattering those clouen people, into as many colonies ouer the face of the earth, as there are diuersities of languages in the earth” (A3) と述べ、植民は神によって始められたと言う。神以上にすぐれた始まりはなく、神の英知は疑問の余地がなく、後世に神の足跡は模倣されているとも言う。ヴァージニア植民の先例を聖書に見出し、それによってヴァージニア植民を正当化しようとするのはこれまでの方法と同様である。聖書に記されていることとヴァージニア植民は同様であると言うことによって人々の疑念を取り去り、安心感を与えるのである。宣言書では聖書以外にも過去の歴史から植民の事例を引き出し、ヴァージニア植民が初めてではないことを強調する。宣言書では最初に植民の宗教性を論じ、ヴァージニア植民の本来の目的をキリスト教布教に置く。それではヴァージニア植民の利益はどうなのか。ヴァージニアの土地の豊かさ、穏和な気候、統治形態、植民者の状態及び信心深い植民者の態度から植民が不可能であるはずはなく、必ずや植民は成功すると述べる。ヴァージニアの肥沃な土地に言及することはこの宣言書以前と同様で、ヴァージニア会社出版の公式文書では土地の肥沃さには必ず触れることになっている。ここで注意しなければならないことはヴァージニア会社の構成は会社に利益の還元を期待し、投資をする人と実際にヴァージニア植民へ赴いた人の二組から成っていたというこである。宣言書では前者のロンドンに留まり、ヴァージニア会社へ投資し、利益を期待する人々には触れず、ヴァージニア植民者について触れているのである。ヴァージニアは肥沃な土地に恵まれており、現在英国がヨーロッパ諸国に依存している産物がすべてヴァージニアで調達でき、不足するものは何もない。これほどの

条件に恵まれながらもヴァージニア植民は結果が思わしくない。追い打ちをかけるように様々な悪い噂がヴァージニアから英国へ伝ってくる。宣言書によればヴァージニア植民の結果が堪ばしくないでヴァージニア評議会は植民の継続か中止かを議論し、ヴァージニアにいるトマス・ゲイツ (Thomas Gates) を本国に呼び寄せ、ヴァージニア植民の現状を問いただした。宣言書はゲイツの報告に従い、ヴァージニアには英国の必要とするものがすべて手に入ると言う。木材、カイコのえさとなる桑の木 (これによりイタリア産出の絹と同じ量の絹が短時間において期待できる)、鉱物 (ヨーロッパの鉄に匹敵する良質の鉄となる)、索具の原料の麻大麻や亜麻、チョウザメのいる川、ブドウ、毛皮の材料となるビーバー、狐、リス、各種の果物、穀物 (英国よりの三倍の収穫が見込まれる) 等、あらゆる物が直接ヴァージニアから調達できるのである。英国が他国に依存している産物が直接ヴァージニアから調達することにより英国の経済が自立できるという最大のメリットがある。これは英国の他国からの経済的自立の観点から見れば、単なる利益とか収益とかいう個人的なレベルではなくより大きな国家的なレベルへと論点が移っていく問題となっている。作者の意図は個人的な利益をヴァージニア植民から期待するのではなく国家全体の利益に資するような利益を考慮すべきだということである。他国への経済的依存を脱し、自給自足の経済を強調する宣言書はヴァージニア会社への出資者、ヴァージニア植民者に愛国心を煽ることになる。宣言書の作者はヴァージニア植民の目的をキリスト教布教に置き、植民の商業性をできるだけ希薄にしようとしている。一般人の関心が植民の利益性にあったなかで作者は意図的に宗教へ視点を移し、商業的性格の強いヴァージニア会社・植民活動を背後に移している。これら宣言書の内容はしかし、これまでのヴァージニア会社の公式文書と比べた場合、それほどの違いはない。特徴としては英国経済の自立をからめてヴァージニア植民を論じていることである。

ヴァージニア評議会は1612年、1609年に *Nova Britannia* の出版を許可したロバート・ジョンソンに *The New Life of Virginea: Declaring the Former Successe and Present Estate of that Plantation, being the second part of Noua Britannia* 出版の許可を与えた⁽⁹⁾。モスクワ、東インド会社総督でヴァージニア会社評議員の Sir Thomas Smith へあてて書かれたものである。その献呈で執筆の動機を明らかにしているように、それはヴァージニア植民への様々な誤解・中傷から植民事業の正当化を説くとともに投資家及び植民者に勇気と激励を与えようとするものである。ヴァージニア植民は国家の威信を賭け、国家の政治的・社会的・経済的諸問題の解消と国外的には大陸諸国への依存脱却を意図した国家プロジェクトで、単なるヴァージニア植民だけを目指したものではない。1610年の宣言書で強調されていた国家プロジェクトとしてのヴァージニア植民をジョンソンは強く意識し、ヴァージニア植民当初は植民を全面的に支持する。会社の存続が危ぶまれてくる1620年前後から会社及び会社関係者を批判する立場にまわるが *The New Life* ではまだヴァージニア植民に

対して協力的姿勢を示している。これまでの宣言書や宣伝文書とはやや異なりヴァージニア植民の利益性を前面に持ち出さず、ヴァージニアの過去・現在・未来に触れ、ヴァージニア植民の現状は厳しいが決して破棄されるべき事業ではないことをジョンソンは強調する。我々の興味を引くのはジョンソンがヴァージニア植民の現状をいかに見ているかである。ジョンソンは植民の目的を王、国家、キリスト教に置き（D3）、商業性に触れることを避けているところがある。ただ宣伝文書の常套としてヴァージニアの肥沃な土地、豊かな自然、産物に触れてはいる。しかしこれまでの宣伝文書と異なり、直接的にヴァージニア会社及び植民からの利益は取り上げない。会社の宗教的使命についてジョンソンは聖パウロの異教徒改宗のための伝道活動に触れた後で次のように言う。

This is the worke that wee first intended, and haue published to the world to be chiefe in our thoughts, to bring those infidell people from the worship of Diuels to the seruice of God. This is the knot that you must vntie, or cut asunder, before you can conquer those sundrie impediments, that will surely hinder all other proceedings, if this be not first preferred. (E3)

「異教徒」を「悪魔の崇拜」から「(キリスト教の) 神への奉仕」へと至らせることがヴァージニア植民のそもそもの目的である。この改宗があつて初めて植民は万難を克服し、植民成就へと至ることができる。更にジョンソンは先住民の改宗に留まらず、原住民の子供への教育の重要性をも説く。彼らを非文明化された状態から文明化へ教化することがヴァージニア植民者の義務ともなるからである。彼らにキリスト教を教え、教化する際には「忍耐」と「人間性」が必要で決して暴力に走ってはならない。あくまでも平和に事を進めなければならず、かくしてヴァージニア植民から“earthly benefits”が自ずと生じてくる。このようにジョンソンは原住民への平和的なキリスト教布教の重要性を力説すると同時にジェームズ一世はキリストに匹敵する“King of peace”となりうることを示唆する。(F) 平和的なキリスト教布教を力説するジョンソンは他方でヴァージニア植民への人々の打算的な関心を批判し、スペインへのライバル意識から即座にヴァージニアへ行くべきだと言う。特に後者のスペインとのアメリカにおける覇権争いはこれまでも論じられてきており、格別新しいことではない。スペインに遅れをとればヨーロッパのみならず新世界アメリカにおいてもイギリスはスペインに劣勢となる。新しい植民地建設は国内外の山積する問題を解決するにあたり是非成功させなくてはならない事業であり、“that viprous brood” (G3) のヴァージニア進出は阻止しなくてはならない。ヴァージニア植民の宗教的使命と同時に愛国心を扇ぎたて、人々の眼をヴァージニア植民へ向けさせようとする愛国者ジョンソンの姿がかいまみられる。しかしいかに高尚な理想的な理念を掲げて一般

人がすぐさま諸手を挙げてその理念の実現に奔走するかは極めて疑問である。理想的な大義名分の裏にはより現実的な即座に入手できるものが必要である。ヴァージニア植民の場合それはヴァージニア会社への投資からの利益の還元であることは誰の眼から見ても明らかである。ジョンソンは *The New Life* でこの問題にはできるだけ触れないようにしていたが、しかしこの利益還元という現実の問題を論ずることなしには人々をヴァージニア植民へ送ることはできない。*The New Life* の終わり近くでジョンソンは次のように言う。

It hath been already declared to the world in sundrie discourses, containing sufficient encouragement to men of vnderstanding, and therefore not needfull heere to lay out againe, the vndoubted certaintie of minerals, the rich and commodious meanes for shipping, and other materials of great vse, ... (G3)

ヴァージニアには確実な鉱物が、イギリスへの輸送には不自由せず、有益な原料がある。更には土壌、気候、貴重な植物と植民者に不利益をもたらすようなものは何もない。

And besides al which things, that Nature hath already seated there, the soil and climate is so apt and fit for industrious mindes, to make plantation of so many pretious plants ... for the vse of mankind and trade of merchants, as to the sense and reason of such as haue seene it, no Countrie vnder heauen can goe beyond it. (G3)

「宝物」に富むヴァージニアに行かないことはない。ヴァージニアの豊かな資源、植物を見ればいかにヴァージニア植民への中傷が間違っているかが理解できる。ジョンソンはヴァージニア植民者の利益について言及し、ヴァージニア会社への投資者の利益についてはあまり触れていない。ただ *adventurers* に全く触れていないかというところではなく、実際には触れているのである。ジョンソンは *adventurers* を (1) 即座の利益を期待し、植民の情勢が不利になるとすぐに植民から手を引いた人 (2) 三年間で三人の *adventurer* を会社へ供給することを引き受けたが最初だけで終わった人 (3) 植民に対して理解を示し、時間も金も惜しまず植民遂行に熱意を示した人、この三組に分類しているが、最後の *adventurer* に対してすらジョンソンは利益の確約はしない。ジョンソンは *Nova Britannia* でも露骨にヴァージニア植民の利益には触れず、もっぱら植民の宗教的使命を強調していた。*Nova Britannia* と比較すると、*The New Life* は読者へのインパクトが弱い。それは宣伝文書と言え、*Nova Britannia* ではヴァージニア植民を聖書から援護し、文体全体に植民のイメージの拡大があり、読者を引きずり込む緊迫感があったが、*The New Life* では聖書からの援用も少なく、作者ジョンソンの熱意がそれほど伝わってこな

い。宣伝文書としてはやや迫力に欠ける印象を与えないでもない。The New Life でジョンソンは新しいヴァージニア植民の生活を描き、世間で言われているようにヴァージニア植民が絶望的な状況にあるのではなく、植民の未来は明るいことを言いたかったのである。その観点から意図的に植民の利益、商業的活動に触れるのを避けたとも言えるが、一般人の最も関心が高かった利益を論ずることはしなかった。植民の利益については Nova Britannia で触れているから今更論ずることもないとジョンソンは判断したのかもしれない。いずれにせよ The New Life では植民の宗教的使命が強調されて会社の商業的性格には触れられていないことは注目に値する。

1613年ヴァージニア・ジェームズタウンのピューリタンの牧師アレグザンダー・ウィテーカー (Alexander Whitaker) が現地からロンドンのヴァージニア評議会・ヴァージニア会社へ植民の現状を伝える *Good News from Virginia* を出版する⁽¹¹⁾。これはヴァージニア現地からの報告書であり、しかもピューリタンの牧師によって書かれていることからかなりの信憑性が期待できる報告書であると考えられる。ピューリタン牧師の見たヴァージニア植民の実体はいかなるものであるか、次にこれに触れてみたい。

ウィテーカーの *Good News from Virginia* はタイトルから判断するとヴァージニア現地の単なる報告書の印象を与えるが、実は説教の形式を取った聖書解釈からのヴァージニア植民擁護の報告書で、ヴァージニアの現状には後半で触れているにすぎない。この報告書には同じピューリタンのウィリアム・クラショー (William Crashaw) の序文があり、そこでなぜウィテーカーが *Good News* を書くに至ったかを述べている。彼によればヴァージニア植民に対する様々な中傷が飛び交っており、ヴァージニア植民への人々の熱意が冷えることを恐れてウィテーカーは *Good News* を書いたのである。クラショーはヴァージニア植民を福音布教の観点からのみ考え、ウィテーカーもその使命に燃えてヴァージニアへ行ったのである。ヴァージニアにはサタンが住み着いており、そのサタンと戦うために「ヴァージニアの使徒」(Apostles of Virginia) としてヴァージニアへ行ったのである。宗教的使命をヴァージニア植民の第一目標とクラショーは考えるが、ウィテーカーが *Good News* を書く際に取り上げた聖書の一節は「伝道の手紙」11章1節の“Cast thy bread vpon the waters: for after many daies thou shalt finde it”「あなたのパンを水の上に投げよ。多くの日の後、あなたはそれを得るかである」である。ウィテーカーの意図は神の国建設を目的としたヴァージニア植民への人々の関心は専ら金銭的な利益にあり、しかも即座の利益を望む物が多いことを指摘することである。しかもヴァージニア植民の現状はおもわしくなく、当初期待していたほどの実績をあげることができないでいる。それ故、人々のヴァージニア会社・植民への投資も思うようにいかない。このような悪循環を断ち切り、停滞したヴァージニア植民への人々の関心を更に喚起するために、ウィテーカーは聖書の一節を解釈し、それをヴァージニア植民に適應することによって植民への精神的援助を行

うのである。この手法はこれまでも見てきたように多くの宣伝文書作者が利用していたものであり、またヴァージニア会社擁護の説教家がすべて利用した手法である。ウィテーカーが「伝道の手紙」を持ち出したねらいは、ヴァージニア植民は金銭的利益が目的なのではなくキリスト教布教がそもそも目的なのだということ、それにヴァージニア植民は神によって導かれた植民であるということである。これまでの宣伝文書とは異なり宗教的色彩が極めて強いものとなっているが、作者がピューリタンということもあってピューリタンのヴァージニア植民への態度を知るうえで興味深い。ウィテーカーは伝道の手紙の一節を以下のように解釈する。つまり援助を必要としている人に物惜しみせず施しをすれば、神はその慈善を見ているから、すぐには報いはないが現世においても来世においても必ずや神から報いがあるというのである。

Give liberally thine almes to all sorts of men, that may stand in need of thy helpe: hide not thine eies at the miserable state of the afflicted; neither stop thine eares at the crie of the poore, though they be not able to recompence thy wel-doing: reproach not thine enemies, when he is punished, but rather ouercome his euill deeds withn thy goodnesse; neither suffer any to returne empty handed from there, whom God shall offer to thy liberality. (E)

神からの報いについては次のように言う。

For though thou canst not presently expect a plentifull reward of thy wel-doing, though the persons, to whom thou hast cast thine almes, bee not able to requite thee, or forgetfull of good turnes, yet be assured of it, that God beholdeth thy charitie, and at his appointed time requite thee, euen in this world, if it be good for thee, thou shalt taste of his bountie, but in the world to come hee hath reserued for thee a most glorious crowne of blessed immortalitie. (E)

現在は利益は期待できないが必ずや神からの報いはあるのだということをウィテーカーは本書で何度も繰り返す。性急な利益を期待すべきではないという主張は説教家達特にジョン・ダンが最も力説した点であったが、ウィテーカーはヴァージニア植民からの即座の利益を期待する人達に警告を発するのである。利益よりもまずヴァージニア植民に物惜しみせず投資をすることが異国における神の国建設に与ることであるという認識を新たにすべきなのである。神の栄光のために資力を惜しむことがあってはならないのである。神からの報いについてウィテーカーは次のようにも言う。

... though God doe not presently reward our well doing, but doe deter the requitall of it for many daies, yet thy good works shall not perish, but God at the appointed time, shall abundantly recompence thy liberality. (G3)

“the appointed time” がいつかは神のみが知ることである。しかしそのときには神は「善行」に対して必ずや報いてくれるのである。神からの報いに対して性急になることはない。ウィテーカーは次のように言う。

Be not ouer hastie with God: God will not yet reward you, that he may make you more famous in the world, that the world may see your zeale, and beare witnessse to the patience of your faith, not to greedie haste of couetous desires. (H2)

イスラエルがカナンに定住できるまで40年を要し、最近では東インド会社が利益をあげうまで3年間かかり、スペインやポルトガルが西インド諸島に土地を構え利益をあげるまで様々な困難に遭遇してきた。これらを考えるとヴァージニア植民は決してあきらめるべきではない。ウィテーカーは世俗的な利益を植民に求めるのでなく、むしろ神の王国をヴァージニアに建設するのだと植民の宗教的使命を強調する。

Awake you true hearted English men, you seruants of Iesus Christ, remember that the Plantation is Gods, and the reward your Countries. Wherefore, aime not at your present priuat[e] gaine, but let the glory of God, whose Kingdome you now plant, & good of your Countrey, whose wealth you seeke, so farre preuaile with you, that you respect not a present returne of gaine for this yeare or two; but you would more liberally supplie for little space, this your Chrisitian worke, which you so charitably began. (H3)

神の王国を異境の地に建設することによって神が何も報いを約束しないかというのではなく、神は「伝道の書」でも「多くの日の後、得る」と言っている。神はアブラハムにカナンの地を、ソロモンには英知と富を、神の子としてキリストをそれぞれ約束し、神の約束に偽りはなかったことを証明している。ならばヴァージニア植民において神が約束を守らないことがあろうかとウィテーカーはヴァージニア植民への神の約束の確かさを疑わない。とにかく物惜しみせずヴァージニア植民へ協力すれば、必ずや報いはあるのだ。世俗的な金銭的な利益は求めるべきではない。ヴァージニア植民の使命をキリスト教布教

においたピューリタン・ウィテーカーの熱弁が遠くヴァージニアからロンドンにまで直接響く渡りのような熱弁である。これまでの現地からの報告書は単なる事実の羅列に終始し、イメージの広がりには欠ける点があった。しかし、ウィテーカーの報告書は現役のピューリタン牧師の手になるだけに豊富な聖書からの引用・援用による説得は読者を魅了せざるをえない迫力を呈しており、従来の公式宣伝文書とは質を異にしている。何よりも特記すべきはウィテーカーがヴァージニア植民の使命をキリスト教布教におき、現世的な利益還元を最小化していることである。神の国建設の使命に燃えた一ピューリタンのヴァージニアからの報告書は殊更ヴァージニア植民の商業性には触れない。ヴァージニア植民には神の奇跡があり、「神の手」があるというが、ヴァージニアという土地そのものも神によって美化された地である (I)。ウィテーカーはヴァージニアの豊富な資源、産物に言及し、植民にとっては理想の地であることを示唆する。最後に次のようにウィテーカーが言うとき、彼は改めてヴァージニア植民の目的を高らかに掲げ、人々の心をヴァージニア植民へと煽るのである。

... remember that you fight vnder the banner of Iesus Christ, that you plant his Kingdome, who hath already broken the Serpents head: God may deferre his temporall reward for a reason, but be assured that in the end you shall find riches and honour in this world, and blessed immortality in the world to come. (I3)

ヴァージニア植民の宗教的使命の強調はこれまでの公式宣言書や現地からの報告書では見られなかったものである。戦闘的伝道者、悪魔の首を折った神及び神の国建設はいずれもピューリタンの特性を表すものとして興味深い。いずれにせよ俗世の富を嫌い、すべてを神のために注げというウィテーカーの主張はピューリタン以外の一般の読者にいかなる影響を及ぼしたかは推測の域を出ないが、ピューリタンのメンタリティを知る上で重要な報告書となっている。

1615年、ヴァージニア植民秘書ラルフ・ヘーマーが1614年6月までのヴァージニアの現状報告書 *A Trve Discoverse of the Present State of Virginia, and the Successe of the Affaires there till 18 of Iune, 1614* を出版した⁽¹²⁾。これは主としてそれまでの植民の結果とイギリス植民者とインディアンとの友好的な関係を報告したものである。この報告書だけなら特に我々の注意を引くことはないが、それには「読者へ」なる一文が添付されており、この小文がヘーマーのヴァージニア植民への真意を知るうえで極めて興味深い。なぜならそこでヘーマーはやはり宗教性の強い植民を強調しているからである。最初にヘーマーは次のように言う。

... what is more excellent, more precious and more glorious, then to conuert a heathen Nation from worshipping the diuell, to the sauing knowledge, and true worship of God in Christ Iesus ? what more praiseworthy and charitable, then to bring a sauage people from barbarisme vnto ciuilitie? what more honourable vnto our countrey, then to reduce a farre disioyned forrainge nation, vnder the due obedience of our dread Soueraigne the Kings Maiestie ? what more conuenient then to haue good seates abroad for our euer flowing multitudes of people at home ? (G3)

ここにはこれまで言及されてき、これ以後も繰り返し強調される植民の宗教的使命が要約されている。異教徒の悪魔崇拝からキリスト教という真の宗教への改宗、原住民の未開な状態から文明化への教化、原住民の国王への服従、及びイギリス国内の急増する人口解消策としての植民、これらをヘーマーは述べる。ヴァージニア植民が単なる植民として終わるのではなく、イギリス国内の政治・社会とも密接に関連する国家的な事業であることをヘーマーは読者に訴えている。ヘーマーはヴァージニア植民への否定的な成果への一つの反論として旧約聖書の民数記を援用する。ヴァージニア植民と類似したエピソードをカナンの地を探索に行ったイスラエル人達の報告に見いだす。これはモーゼに命令されて約束の地カナンを探りに行ったカレブとヨシュア達の報告に関する箇所である。カナンを探索に行った人達のなかにはカナンに対して賛否両論があった。カナンは「乳と蜜の流れる地」であるが、そこに住む人達は強く、その町々は堅固で大きいのでイスラエル人は住むことができないと言う人達、それに対してカナンを攻撃し奪取することは可能だとモーゼに進言したのはカレブとヨセフである。主の命令に反し、カナンは征服不可能でその上下劣な中傷を言いふらす人達をモーゼは「疫病をもって彼らを撃ち滅ぼし」「あなた（カレブ）を彼らより大いなる強い国民としよう」と言っている。人々の嘆きを静め、カナンは「非常に良い地」であり、主の命ずるままにカナンを征服を主張したカレブとヨシュアに耳を傾けなければならない、とヘーマーは言う。カレブは次のように言った。

Let us goe up at once and possesse it, for vndoubtedly we shall ouercome it; (H)

人々の中傷・批判をものともせず、ただ主の教え通りに実行すれば約束の地カナンは得られ、主からの祝福がある。しかもカナンをイスラエル人は武力ではなく「寛大」「愛」「友好」「宗教」によって獲得した。このようにヘーマーは民数記からヴァージニア植民を擁護し、人々を激励する。ヘーマーは民数記をヴァージニア植民に適応するのである。なるほど今は植民はうまくいかず、人々から中傷・批判があるかもしれないがしかし、

気にすることはない。なぜならば聖書でも同様なことがあったが神が成功へと導いてくれたからである。ヘーマーは、ヴァージニアをカナンに、植民者をイスラエル人にたとえ、巧みに論を展開し、ヴァージニア植民は必ず成功すると言うのである。ヘーマーにとって、ヴァージニアは“heavenly new Ierusalem” (H2) にも等しい地である。かくしてヴァージニア植民に対し疑心暗鬼になっている人々の不安を払拭しようとする。それではヴァージニア植民のもう一つの関心事である「利益」についてはどうか。ヘーマーはこれについて次のように言う。

what more profitable then to purchase great wealth, which most nowadaies gape after ouer-greedily: all which benefits are assuredly to bee had and obtained by well and plentifully upholding of the plantation in Virginia. (G3)

現地からの豊富な産物を購入すれば利益は必ず生ずると言う。とにもかくにもヴァージニア植民事業を支持し、会社に投資をすればよいのである。そして賛同者はただ真面目な植民者を現地へ送れさえすれば、結果は自ずと明らかとなる。そして利益を性急に求めてはならないとも言う。

As for profit it shall come abundantly, if we can with the husband-men, but freely cast our corne into the ground, and with patience waite for a blessing. (H)

ヘーマーは植民の商業性については多く言及しない。ただ植民の収益性については確約できることを強調している。ヘーマーは植民の主要な目的を異教徒の改宗とし、その収益性については軽く触れているだけである。ただ辛抱強く待てさえすればよいのである。ヘーマーのヴァージニア植民擁護はこのようにその宗教的使命及び収益性からなるが、それは従来の主張と変わるところはないのである。

ヴァージニア会社は1624年の解散まで更に二つの宣言書を出版する。1620年の *A Declaration of the State of the Colonie and Affaires in Virginia: with the Names of the Aduenturers, and Summes Aduentured in that Action*⁽¹³⁾ と1622年の Edward Waterhouse の *A Declaration of the State of the Colonie in Virginia*⁽¹⁴⁾ である。以下これらのなかでヴァージニア植民がいかに報告されているかを見てみたい。

4

1620年前後はヴァージニア植民統治に関して重大な変化が生じようとしていた時期であった。ジェームズ一世がヴァージニア植民総督選挙に直接干渉し、時の総督サンディズ

(Sir Edward Sandys) の更迭を要求してきたからである。ジェームズ一世はヴァージニア植民評議会が本国の希望に反し、民主的な選出方法で総督を選ぼうとしていたことに難色を示していた。サンディズはヴァージニア植民の歴史においては燦然たる名を残すが、ジェームズ一世からは本国の指令通りに行動しないことで反感を買っていた。このような時期にヴァージニア会社は 1620 年 6 月 22 日宣言書を出版するが、ジェームズ一世のヴァージニア植民統治への不満は触れられておらず、専らこれまでと同様ヴァージニアが不毛で利益をもたさらないとのうわさが虚偽で悪意に満ちたものであることに反論しているだけである。従来の公式宣伝文書と同様、いかにヴァージニアが肥沃で広大でかつ十分な水に恵まれているかを、穏和な気候、健康的な風土、豊かな自然への賛美とからませて、世間の批判に答えている。植民に専念する人々にとってヴァージニアは神の摂理によってイギリスに取っておかれた土地であり、王と国家にとっては力となり名誉となる土地である (A4)。ヴァージニアは “the richest commodities of most parts of the world” を産出し、現在ロシア、ノルウェー、デンマーク、ドイツ、フランス、スペイン、ペルシア、イタリアに依存している産物を直接ヴァージニアで入手可能であることを指摘する。ヴァージニアは不毛な土地であるとの批判は誤っており、真実性に欠けることを強調する。イギリスのヨーロッパ諸国からの経済的自立についてはこれまでも論じられてきており、この宣言書が初めてではない。ヴァージニア植民を悪く思ったり中傷したりする人は「無知な人」か「腐敗した心」と「邪な意図」を持った人であると言う。

To conclude, it [Virginia] is a Countrey, which nothing but ignorance can thinke ill of, and which no man but of a corrupt minde and ill purpose can defame. (B)

ヴァージニア植民の正当性をこの宣言書では植民の現状を見ることによって訴える。最初に考えなければならないのはこれまでの植民者の数である。宣言書には A Note of The Shipping, Men, and Prouisions sent for Virginia, by the Treasurer and Company in the yeer, 1619 が付記されており、1619 年のヴァージニア植民者 1,200 人が列挙されている。この数字から見てもヴァージニア植民への人々の理解が薄れたとは思われない。更にヴァージニアでは植民の運営・管理も整然としており、“the laudable forme of Iustice and gouernment” (B) が見られ、何ら問題はない。植民への人々の不安を取り除こうとする姿勢が見られる。これまでのようにヴァージニア植民の宗教的使命や商業的性格をこの宣言書では全面的に扱わない。ただ *adventurers* に対しては 12 ポンド 10 シリングで 100 エーカーの土地が手に入ることに触れているが、出資者への即座の利益還元は取り上げていない。ヴァージニアの自然条件から利益の還元が保証されることは言うまでもないと言いたいのであろうか。とにかくヴァージニア植民の現状を見れば、この植民がいかなる性

格の植民であるかが理解できる、と宣言書は訴えたいようである。宣言書の最後で “this glorious worke, tending so much to the propagation of the true service of Almighty God, to the adding of greatnesse and honour to our King, and to the benefit of our whole Nation in disburdening their multitude” (B3) と言うとき、やはりヴァージニア植民の目的をキリスト教布教、国王への名誉及び急増人口問題解決に置いているのである。最後の文言はこれまでの公式宣伝文書に則した文言であるが、いずれの文書にもこれらの文言が表れるということはキリスト教布教というヴァージニア植民の目的がたとえそれが表向きの目的であったとしても共通の認識であったと言えるだろう。

1622年8月ウォーターハウス (Edward Waterhouse) は *A Declaration of the State of the Colonie in Virginia with a Relation of the Barbarous Massacre in the Time of Peace and League, treacherously executed by the Natiue Infidels, vpon the English, the 22 of March last* を当局の検閲を得て出版した。この宣言書は二つの意味において興味深いものである。一つは1624年にヴァージニア会社が解散するが、その2年前に書かれているということである。ジェームズ一世がヴァージニア植民の統治・管理に意義を唱え、総督人事に介入してき、それに対しヴァージニア植民側は徐々に本国からの影響を脱し、自らの手による選挙によって総督を選び、本国の意図とは裏腹に「民主的に」ヴァージニア植民を管理しようとしていた。もう一つは宣言書にもあるように宣言書出版3カ月前の3月22日にインディアンの襲撃を受け、347名が殺害されたことである。これはインディアンとの友好関係にあったとされていたなかでヴァージニア植民の歴史においては衝撃的な事件であった。このような緊迫した状況のなかでウォーターハウスは依然として従来通りにヴァージニアの肥沃な土地、豊かな資源を賛美し、イギリスが他国への経済的依存から脱却できることを強調しているのである。1620年の宣言書と酷似した内容で、1620年の宣言書もウォーターハウスが書いたのではないかと思わせる。たとえば次の文章は上に引用した文章と同一である。

To conclude, ... it [Virginia] is a Countrey which nothing but ignorance can thinke ill of, and which no man but of a corrupt minde & ill purpose can defame. (B3)

ウォーターハウスは、ヴァージニア植民の現状を土地の肥沃さ、豊富な資源、植民の実績から擁護し、人々の植民への不安を取り除こうとしている。これまでは1620年の宣言書の繰り返しで、格別新しさはない。1622年の宣言書で注目すべきはここでウォーターハウスが同年3月のインディアン襲撃に直接言及し、インディアンへの強硬な態度を表明していることである。これまでインディアンはイギリス人と比較的友好的な関係にあったが、彼らの裏切りにより347名ものイギリス人が殺害され、その名前はすべて記されている。インディアンはイギリス人の恩に仇で返すような残虐な行動をし、ウォーターハウス

は彼らの裏切り行為を激しく攻撃し, “Viperous brood”, “wicked Infidels” (D) への露わな感情を示している。ウォーターハウスはこの事件を契機に (1) 裏切り行為への処罰 (2) インディアンの土地の没収 (3) インディアンの産物のイギリスの所有 (4) インディアンの教化よりは征服 (5) 奴隷としてのインディアン使用 (6) インディアンの虐殺事件の今後への教訓 (7) インディアン襲撃事件をイギリス人慰めの契機とすること, を強調する。ヴァージニア植民擁護者・支持者としてウォーターハウスはインディアン襲撃事件を単なる事件として終わらせることはしない。ウォーターハウスは, 歴史を見ても大事業には必ず大惨事や危害がつきもので, ヴァージニア植民が経験したインディアン事件もイギリスが大事業を行っている証であり, 何もくじけることはないと言う。大国は幾多の困難を経て初めて偉業を達成できると檄をとばすのである。いわば災い転じて福と成す精神である。“constancy” と “courage” で難局にあたるべきで (E3), 植民の機は熟しているとウォーターハウス言う。

To conclude then, seeing that Virginia is most abundantly fruitfull, and that this Massacre must rather be beneficiall to the Plantation then impaire it, let all men take courage, and put to their helping hands, since now the time is most seasonable and aduantageous for the reaping of those benefits which the Plantation hath long promised: (F)

幾分扇情的な印象も免れないが, インディアン襲撃事件後のヴァージニア植民への疑念・不安除去のためにはこれ位の檄は必要であった。インディアン襲撃を悲観的に見ないで逆境をばねに更なる植民遂行へと読者を駆り立てるレトリックの強い文章となっている。これまでの宣伝文書に見られたヴァージニア会社の宗教的使命や利益性にはほとんど触れていないが, ただ 12 ポンド 10 シリングの出資に対する 100 エーカーの土地の提供については前回同様触れている。全体的なまとめとしてウォーターハウスは次のように言う。

Lastly, it is to be wished, that euery good Patriot will take these things seriously into his thoughts, and consider how deeply the prosecution of this noble Enterprise concerneth the honor of his Maiestie and the whole Nation, the propagation of Christian Religion, the enlargement, strength, and safety of his Maiesties Dominions, the rich augmentating of his Reuenues, the imploiment of his Subjects idle at home, the increase of men, Mariners and shipping, and the raising of such necessary commoditie, for the importaion of which from forren Countries so great and incredible summes are continually issued and expended. (F)

ここにヴァージニア植民の目的がすべて列挙されている。ヴァージニア植民は（１）国王と国家全体の名誉（２）キリスト教の布教（３）国王領土の拡張，教化，安泰（４）国家収入の増大（５）無職者の雇用（６）植民者，水夫，輸送の増加（７）必要産物の栽培，に関わる「崇高な事業」である。ヴァージニア会社が単なる商業的企業ではなく国家全体に関わる事業であることをウォーターハウスは述べる。これらすべてはこれまで論じられてきたことであって，ウォーターハウスはそれを繰り返しているにすぎない。ただここでもキリスト教布教をヴァージニア植民の目的の一つに挙げていることに注目したい。ウォーターハウスの宣言書の新しさはインディアン襲撃事件に言及したことで，ジョン・スミス（John Smith）は1624年出版の *The Generall Historie of Virginia, New-England, and the Summer Isles* のインディアン襲撃事件記述（第四巻）でほとんどすべてウォーターハウスの記述に従っている⁽⁵⁾。ウォーターハウスはインディアン襲撃事件を更なる植民の発展の契機にしようことを強調し，ヴァージニア会社及び植民者を励ましている。しかし，キリスト教布教や植民の利益性にそれほど言及していないことは従来の宣伝文書の性格からすればルール違反の感がないでもないが，巧みに読者を植民へと煽るレトリックにはヴァージニア会社擁護の説教を思わせるものがある。

1606年にジェームズ一世から最初の勅許状を得て，国王公認のもとにヴァージニア植民は本格的に始まった。本論では三つの勅許状，ヴァージニア会社出版の宣言書，及び個人の現地からの報告書等を吟味することによってヴァージニア会社・植民の実体をさぐるうとしてきた。本論の目的は公式のヴァージニア植民関係書類と私的な個人のヴァージニア植民への見解からヴァージニア会社及び植民の核心へ迫ることである。本論では後半の個人のヴァージニア植民からの報告書，旅行記，書簡を扱えなかったが，これらについては校を改めて論じたい。

注

- (1) Perry Miller: *Errand into the Wilderness* (Massachusetts: Harvard University Press, 1956), Chapter IV 参照。
- (2) S. M. Kingsbury (ed.): *Records of the Virginia Company of London* (Washington, D. C.: Government Printing Office, 1906 - 1935), vol. 1, p. 23.
ハクルート「西方植民論」(東京: 岩波書店『イギリスの航海と植民二』, 1985), 特に第20章参照。
- (4) *The Three Charters of the Virginian Company of London with Seven Related Documents; 1606 - 1621 with an Introduction by Samuel M. Bemiss* (Virginia, 1957), p. 2. 以下勅許状や規約・指示・命令を引用する際は頁数のみを記す。
- (5) 『イギリスの航海と植民二』(東京: 岩波書店, 1985), p. 19, p. 20.
- (6) テキストは以下を使用した。Robert Johnson: *NOVA BRITANNIA* (Amsterdam: Walter J.

- Johnson, Inc. *Theatrum Orbis Terrarum Ltd.*, 1975). 以下頁数のみを記す。
- (7) テキストは以下を使用した。 *Early Accounts of Life in Colonial Virginia 1609 - 1613 Facsimile Reproductions of Works by Robert Gray, Richard Rich and Alexander Whitaker* (New York, 1976). 以下頁数のみを記す。
 - (8) テキストは大英図書館所蔵による。以下頁数のみを記す。
 - (9) テキストは大英図書館所蔵による。以下頁数のみを記す。
 - (10) テキストは以下を使用した。 Robert Johnson: *THE NEW LIFE OF VIRGINEA* (Amsterdam: Walter J. Johnson, Inc. *Theatrum Orbis Terrarum Ltd.*, 1971). 以下頁数のみを記す。
 - (11) テキストは以下を使用した。 *Early Accounts of Life in Colonial Virginia 1609 - 1613 Facsimile Reproductions of Works by Robert Gray, Richard Rich and Alexander Whitaker* (New York, 1976). 以下頁数のみを記す。
 - (12) Ralph Hamor: *A true discovrse of the present estate of Virginia* (Amsterdam: Walter J. Johnson, Inc., *Theatrum Orbis Terrarum Ltd.*, 1971). 以下頁数のみを記す。
 - (13) テキストは以下を使用した。 *A Declaration of the State of the Colonie and Affairs in VIRGINIA: with The Names of The Adunturors, and Summes aduentured in that Action* (Amsterdam: Walter J. Johnson, Inc. *Theatrum Orbis Terrarum Ltd.*, 1973). 以下頁数のみを記す。
 - (14) テキストは以下を使用した。 Edward Waterhouse: *A Declaration of the State of the Colony in VIRGINIA* (Amsterdam: Walter J. Johnson, Inc. *Theatrum Orbis Terrarum Ltd.*, 1970). 以下頁数のみを記す。
 - (15) John Smith: *The Generall Historie of Virginia, New-England, and the Summers Isles* (Ann Arbor: University Microfilms, Inc., 1966) , p. 105 ff.

References

- J. Adair: *Founding Fathers The Puritans in England and America* (London: J. M. Dent & Sons Ltd., 1982)
- C. H. Andrews: *The Colonial Period of American History* (New Haven: Yale University Press, 1934)
- Philip L. Barbour: *The Three Worlds of Captain John Smith* (Boston: Houghton Mifflin Company, 1964)
- Philip L. Barbour: *The Jamestown Voyages under the First Charter 1606 - 1609* 2 vols (Cambridge: At the University Press, 1969)
- Philip L. Barbour: *Pocahontas and Her World* (Boston: Houghton Mifflin Comapny, 1969)
- R. Beverley: *The History and Present State of Virginia* (Chapel Hill: The University of North Carolina Press, 1947)
- C. B. Bridenbaugh: *Vexed and Troubled Englishmen 1590 - 1642* (New York: Oxford University Press, 1968)
- A. Brown: *Early Politics in Early Virginian History* (Boston and New York: Houghton, Mifflin and Company, 1901)
- P. H. Bruce: *Institutional History of Virginia in the Seventeenth Century* 2 vols. (Massachusetts: Peter Smith, 1964)

- W. F. Craven: *Dissolution of the Virginia Company* (Massachusetts: Peter Smith)
- J. H. Kettner: *The Development of American Citizenship* (Chapel Hill: The University of North Carolina Press, 1978)
- G. B. Parks: *Richard Hakluyt and the English Voyages* (New York: American Geographical Society, 1928)
- E. J. Payne (ed.) : *Voyages of the Elizabethan Seamen to America* (Oxford: At the Clarendon Press, 1893)
- G. W. Prothero (ed.) : *Select Statutes and Other Constitutional Documents Illustrative of the Reigns of Elizabeth and James I* Third Edition (Oxford: At the Clarendon Press, 1906)
- David B. Quinn: *Set Fair for Roanoke Voyages and Colonies, 1584 - 1606* (Chapel Hill and London: The University of North Carolina Press, 1985)
- David B. Quinn: *England and the Discovery of America 1481 - 1620* (New York: Alfred A. Knopf, 1974)
- A. L. Rowse: *The Elizabethans and America* (London: Macmillan & Co Ltd, 1959)
- A. L. Rowse: *Shakespeare's Southamton Patron of Virginia* (New York: Haper & Row, 1965)
- Patricia Seed: *Ceremonies of Possession in Europe's Conquest of the New World, 1492 - 1640* (Cambridge: University Press, 1995)
- Bernard Sheehan: *Savagism & Civility Indians and Englishmen in Colonial Virginia* (Cambridge: Cambridge University Press, 1980)
- J. M. Smith (ed.) : *Seventeenth-Century America* (Chapel Hill: The University of North Carolina Press, 1959)
- John Stoye: *English Travellers Abroad 1604 - 1667* rev. ed. (New Haven and London: Yale University Press)
- L. G. Tyler: *England in America* (New York: Greenwood Press, 19699)
- Alden T. Vaughan: *American Genesis Captain John Smith and the Founding of Virginia* (Boston and Toronto: Little, Brown and Company, 1975)
- T. J. Wertenbaker: *The Shaping of Colonial Virginia* (New York: Russell & Russell, 1958)
- T. J. Wertenbaker: *Virginia under the Stuarts 1607 - 1688* (New Jersey: Princeton University Press, 1914)
- T. J. Wertenbaker: *Give me Liberty The Struggle for Self-Government in Virginia* (Philadelphia: The American Philosophical Society, 1958)
- T. J. Wertenbaker: *The Planters of Colonial Virginia* (New Jersey: Princeton University Press, 1958)
- L. B. Wright: *Religion and Empire The Alliance between Piety and Commerce in English Expansion 1558 - 1625* (New York: Great Seal Books, 1959)
- L. B. Wright: *The Atlantic Frontier Colonial American Civilization* (New York: Octagon Books, Inc., 1965)
- Louis B. Wright (ed.) : *The Elizabethans' America* (Massachusetts: Harvard University Press, 1966)
- Silvio Zavala: *New Viewpoints on the Spanish Colonization of America* (Philadelphia: University of Pennsylvania Press, 1943)